

ナシヨナル・トラスト

中 村 芳 男



「知床ではどんな施業を?」、「いやー木を伐らぬ、となると仕事らしい仕事はないそうですね、林道、もちろん造れませんし」と、網走駅まで迎えに来てくれた友人Iが彼自身所属する部門の苦しい内情を語ってくれた。

もう幾度か通ったこの道だが、今回は珍しく斜里岳をはじめ別海、遠音別、羅臼、硫黄、知床岳と半島の山々がその端ばしまで夕暮れになろうとする空の明るい黄色の中にくっきりと海を区切ってオホーツクの彼方に没しているのが美しく、しばらくはしゃべりたくなかった。

知床で夢を買いませんか、は一民間人G氏の発想だったように記憶している。彼は、はじめから具体的に一口八千円と決めていたわけではない。ジャガ薯を植えたり、磨きびを取ったりしながらだんだん計画を練り、苦しい中からまず実践をと心がけたのがはじまりだった、と思う。それを聡明な藤谷町長がとりあげ、地方自治体の仕事の中に組みこんでくれたのが出発点ではなかったか?

昭和五十二、三年頃、心筋梗塞寸前という病状からやつと脱して、まだ寝ていた私に、Iさんから電話があった。「知床百平方m運動のことで藤谷町長が上京されNHKで放送されるが、あなたが病気で寝ておられるので私が替りに出させてもらいます」というようなことだった、と思う。「ようここまで来たな、Gさん」と思わず床の中で呟いたものだ。

その頃は林野庁の松枯対策のスミチオン空散、東電の高圧送電線の丹沢縦断などの問題が重なり、それほど疲れたとも思わぬのに後頭部の右左に針をさすような痛みを感じ、急遽医者に行き床についてしまったときだった。

昭和四十六年、その頃は七月一日に環境庁ができたのだが、民間運動はまだ余り相手にされなかった自然保護運動だったが、十一年たったこの昭和五十七年九月には環境庁長官、自然保護局長以下数名がこの民間運動から出発した「知床で夢を買う」の五周年記念に出席してくれるようになったとは、それこそ夢のような話だ（あの頃は、お願ひに行っても「全国」と名乗ったところで、たかが民間の任意団体でないか」といわれたものだ）。

ひる間の集まりでは、民間人の発想が藤谷町長の深いご理解で地方自治の行政の中へ組みこまれたのが大きな成功となったのだと賞賛されたが、町長さんをはじめ、町全体の同じ考え方に「自然保護運動はこれではなくては」としみじみ思った。

さて、こう考えてくると昭和四十六年も押し詰った雪の夜、三平峠下の吹雪の中で疲労の極、死んで逝った平野長靖さんのことを思い出す。彼がこと切れる前、尾瀬の自然か、自然保護運動全体にか、「前途に光明を見た」ように言ったそうだが、当時、私は床を叩いて「その夢を私も見たい」といつて泣いたものだが、いまホテルのベッドで、長靖さんここまで来たよ」と云えた（とにかくこの北の果てまで自然保護運動が長官を呼べたのだから）。だが、この「ここまで来たか」の感懐とは別に、それだけ日本の自然破壊が進んだのだ、とも思う。

この夜、交歓会の席で道庁のある方が「昨年はお苦勞さまでした、慎重にやります」と心をこめた云い方をされたが、昨年といえば日高視察、すると「日高のことかな？あるいは道の自然環境全体のことかな？」と思いはじめたら、ホテルへ帰っても心配で眠られなくなってしまう。しばらく「地下鉄の電車はどうして——？」の三球・照代のみ才を味わう思いで苦笑した。

翌日、眼ざめて早速この私の心配を北海道の仲間にし、次の話も加えて念を押しておいた。それは、あの南アルプス・スーパールン道のことだ。あの道路は執拗な林野庁関係のゴリ押しに負けて条件づきの開通を見たものの、今夏の災害でもうめっちゃめっちゃになり、そのひどさは「二、三年では恢復の見込みが立たぬ」ということだ。むしろこの天災を教訓に「恢復させぬよう」にしておかなければならぬ、と思う。

あの災害の報は災害の最中にもう伝わって来た。「当然だよ」と思った。「いい気味

だ」と言えぬのが口惜しい。というのは、今後はいささかの雨でも川水をにごし、下流に言いしれぬ悪影響をもたらすだろう、いちばんしも手の多目的ダムなんてものは当初の計算より異常に早く埋まってしまうだろう。治山事務所が「災害」で復旧工事をやるのか、受益機関である村や町が予算を組んでやるのか知らぬが、いずれにしてもこの膨大なムダ費が市民の税金でないと出てこない以上、国民の負担であることはまちがいない、といまさらのようにあのとき建設に向って頑張った役人や、ただ一回の視察で建設に豹変した美貌の婦人評論家、急逝した元某長官の顔などがつきつぎに浮かんで消える。だからこそ、もし日高のことだったら「慎重」にしてやらぬ。ということにしてほしい。やりたいのはいつも同じパターンで、政治家と土木屋が主で、学者や経験者はいつでも反対なのだから。

今春の林審で治山の問題が論議された第六次五カ年計画についてだった、提出された予算の曲線図が年とも大きく、かつ急激に上昇線を描いているのが目についた。もし、この曲線に年々の伐採量、それから伐採による崩壊量などの関連曲線を並べたら、どういうことがわかるだろうか。

ためしに、「皆伐は何度から禁止するか」と聞いてみたら、キツパリと「三十度以下、なおそれでも危険と思われる地域は択伐にするよう指示している」ということだったが、私のところの皆伐はひどいものだし、またそれを証明するかのようには、山の表皮は剥がされている。「伐らなければ喰えぬことになっている」という林野庁のあり方について、いつまで役人も政治家も眼をつぶっているつもりなのだろうか。

さて、知床のシンポジウムは、なかなか盛会だった。この計画を推進した側の人や、パネル報告に招かれて発表した人々の報告も素晴らしかった。知床や岡山のように成功に向って着々進んでいる報告もあれば、和歌山県田辺市のように天神崎海岸買い取りの苦辛などは聞いているだけで苦しくなり、永遠に自分のものとならないことのために借金し、利子の支払いに追われる先生や、「ご自分の退職手当全額を投げ出した先生」（高校教諭）方のために涙が出た。「あなたには家庭がある、奥様も子供さんもあるだろう、あなたと同じようにその海岸の値うちを評価し、そのために苦しみに耐えていらっしやるのだろうか」と叫びたい思いだった。

あとで「しまった、あの場で帽子をもってまわして、せめて今年の子の一部だけで

も募金してさしあげればよかった」と思ったほどだ。その土地の観光業者にも呼びかけたいものだ。「あの先生たちの苦勞を知らずに君たちは観光事業で喰っているのだよ、ぜひ応援してあげてくれ」という風に。

この集まりの内容は各新聞に詳しく報道されているのでここでは削るが、なんと云っても（失礼ながら）このような僻地に現職の大臣が顔を出して挨拶をし、激励し、ご自分も入会し、酒をくみかわし、しまいには約束もし（公益信託制度の設立）ナショナルトラスト制度の名前も「考えよう」と言い出し（これは会場からあがった声にただちに翌日の記者会見で応えた）、さらに記念植樹までおつき会いしてくれた。ということは永くこの地の人々の記憶に残り、またこの仕事にはずみがついて行くことだろう。

だが、こういう風にはずみがついて運ばれて行くときに必ず裏があるものだ。その裏とは、「林野行政」のことである。前述の友人Iが言ったように独立採算制の林野庁の中で斜里管林署だけが例外であるはずがない。それだから、民間人の発想からはじまったこの永久に子孫に残す自然林育成の構造は当然、知床半島の宇登呂以東の保全にも厳正なものとならざるを得ない、とすれば少なくとも斜里も羅臼も林野庁の経営費くらの面倒はみてあげなければならぬ。同じ国の中のことだから林野庁から環境庁に代るのか、あるいはその分だけ一般経費と同じような予算のとり方となるのかわらぬが、反対運動をすることは簡単だが長官や他の為政者に常に考えていただきたいのは、それから先のことだ。

以前、こんな発言をしたことがあった。「林野庁の独立採算制を廃止して、一般会計で予算をまかなうようにしたら」と、後々の子孫のために残しておかなければならぬ自然が、次々と破壊されて行くので敢えて発言したのだが、誰もとりあげてくれなかった。あるいは発言した場所が悪かったのかも知れないが、それにしても庁側の列席者は当時、副総理のM氏が主座に坐しておられたのだが。

その時は聞かれなかったが馬鹿の一つ覚えのように、国でも県でも発言をくり返していたら、神奈川県が、「まだ国でもやっておらぬことだが」と県有林予算の支出を一般会計からやってくれた。しかし、その頃の県予算としては大きかったと思う。ごく小さな県有林の二億四千万円だったから。あの日「大臣、ぜひお聞き願いたいことがございます」と云ったのはこのことだったのだが、いたずらに声を出すことに気がつかいす

きた（がんのため上顎が合成品でできているのでうるおいはなくなると言葉になりにくい）ために、大声を出した割にはまずかったように思う。

かつて山形県内の林道の問題で林野庁の組合関係の人たちと四手井先生、石塚先生方のお伴をして廻ったことがある。そのとき組合関係の人たちはどこでも「われわれは自然保護ではない森林を思う働き手の組合員だ」ということを強引に主張しておられた。森林組合員は自然保護思想がなくてもいいはずがないので、こんな断わり方をしない方がよいのに、と思ったことだ。

いまこの知床のほんの片隅へ来てみて、私どもの自然保護運動のすぎ越し方を思ってみる。昭和三十五年から二十年有余を呻いたり叫んだりしながらここまで来た、北海道へは何度来たろう。いつも「このつきにくるときは単なる旅行者でありたい」と思うのだが、そうさせてもらえらるだろうか？

さて最後に一言、長官に質問申しあげて筆をおく。原文兵衛先生の自然保護にかかわる心づかいには大いに共鳴できるものがあり嬉しく思ったが、それなのになぜ志布志湾だけを継子扱いなさったのであろうか。歴代環境庁長官が「開発させない」とおっしゃったことなのだが。

（丹沢自然保護協会会長）